

人権だより

(令和3年度2月号)

川之石高校人権委員会 担当 1年次3組

3学期の1・2年次の人権・同和教育ホームルーム活動は、2月18日(金)の実施です。1年次は「差別はどのようにしてつくられたか」というテーマで、歴史学習に入ります。2年次は「解放への歩み～戦後の解放運動～」というテーマで、先人の差別解消に向けた闘いが現代の様々な法律や制度に結びつき、今もなお取組が続いていることについて学習します。活動の様子や報告は3月号で行う予定です。

今月号は、夏季休業中の課題だった人権作文の中から、本校の代表として※八幡浜市人権尊重作品審査会(12月)に出品された人権作文の紹介をします。多様な社会を目指して考える良い機会になるとと思いますので、みなさんも一緒に、多様な社会を目指す大切さを考えてみましょう。

令和3年度 八幡浜市人権尊重作品審査会出品作文

『多様な社会を目指して』 3年次2組 宇都宮光希

「LGBT」とはレズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダーの各英語の頭文字を組み合わせた表現で、性的少数者(セクシャルマイノリティ)を表す言葉の一つとして使われる。多様性の時代と呼ばれる今、誰もが一度は聞いたことがあるだろう。少し前までは男女の恋愛だけが当たり前だったり、テレビ番組に出ているオネエタレントなどは、少し異質な存在として扱われたりしていた。しかし今はLGBTを否定した政治家がネット上でバッシングを受けるなど、LGBTへの理解は進んできている。それは、田中圭さん主演の「おっさんずラブ」や西島秀俊さん主演の「きのう何食べた?」、古田新太さん主演の「俺のスカート、どこ行った」など、性的少数者が主人公のドラマや映画が年々増え、身近に感じるようになったからなのかもしれない。実際LGBTが題材の作品を観ると、性的少数者ならではの悩みや境遇に直面しながらも、自分らしく生きている主人公の姿にとっても感動する。しかし、メディアなど目立つところでは当たり前のことと認められてきているが、まだまだ見えないところで差別に苦しんでいる性的少数者が沢山いると私は考える。

私たちが普通に生活を送っているつもりでも、知らず知らずのうちに性的少数者を傷つけていることがある。例えば同性へのスキンシップが激しい人のことを、「レズビアン」「ゲイ」と表現する人たちがいる。これは性的少数者に対する立派な差別だが、冗談交じりに軽々しく放ったこの言葉を差別だと自覚していない人がほとんどだ。また先ほど挙げたようなLGBTが題材の作品を「気持ち悪い」「おかしい」と言って受け入れられない人もいる。当事者に言わなければ差別にあたらないと思う人もいるかもしれないが、人口の約10%はLGBTを含めた性的少数者であると推定されている。周りには性的少数者がいないと思っても、それは見えていないだけで本当はいるかもしれない。直接的に差別はしてはいなくても、自分にとっては何気ない一言が性的少数者を傷つけている可能性は十分あり得るのだ。

性的少数者が、実際どのような気持ちになっているのか調べてみると、そういった言葉を聞くと自尊心を傷つけられ、ますますカミングアウトしづらくなるという。更衣室やトイレ、寮など男女で分けられているものを利用する際に戸惑っても、相談できる相手がおらずストレスを感じ、更に心を閉ざしてしまうそう。ドラマの中の主人公はどんな逆風にも負けず立ち向かっていたが、それはや

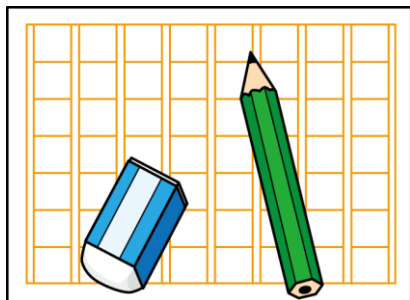
はり作品の中の話で、ほとんどの人はそう簡単にはいかない。また、勇気を出して家族にカミングアウトするも理解が得られず、家を追い出されたという人もいた。私は性的少数者であることは罪ではないのに、どうして家を追い出されなくてはいけないのだろうと思った。しかし、もし自分がその人の家族の立場だったらどうするだろうと、ふと考えてみた。LGBTを肯定することは簡単なようだが、自分の友達が、先生が、家族が性的少数者だったら、私は動揺することなく受け入れられるだろうか。正直、簡単に受け入れられるとは思えない。さまざまな場面で「性的少数者の人々に出会ったらどうしますか」という問いに、「肯定して理解者になります」と答えてきた。けれども、それは中身が空っぽな答えなのだ実感した。そして自分はLGBTに理解があるふりをして、実は他人事としてしか考えていなかったのではないかと自分自身が恥ずかしくなった。

「理解者になろうとする前に、自分だったらどうか想像してみることに」。LGBTについての記事を探している過程でV6の井ノ原快彦さんのこの言葉が目にとまり、強く印象に残った。理解することばかりを考えていた私に、自分が性的少数者だったら家族にこう理解してほしいと視点を変えて想像することを教えてくれた。自分の視点で考えることで、私がしてほしいことを周りにしてあげればいいんだということに気付くことができた。

一人ひとりがこの思考を持っていれば、性的少数者への差別は減っていくだろう。もちろん世の中にはそれぞれ違う考えを持つ人で溢れているのだから、簡単なことではない。けれど、まずは自分だけでもその思考で行動し、それが少しずつ広がって性的少数者の人だけでなく誰もが生きやすい世の中になればいいと思う。

今年度の※に参加された、本校の細川裕子先生から、人権作文への取り組み方について、アドバイスをいただきました。

今年度、人権作文の高校部門では、障がい者差別や性的少数者への差別解消をテーマにした作文の応募がありました。人権作文は、人権問題への科学的認識ができていないか、問題を主体的に受け止め解決しようとしているか、などが表現されていることが大切です。自分自身や家族、友人など身近な存在の実体験から書かれた作文は、差別された人の気持ちに寄り添うとともに、人権問題を自分事としてとらえ、差別解消への強い思いが伝わってきます。皆さんの中に、自分は経験したことがない、周りにそんな人がいない、と思っている人はいないでしょうか。差別は自分から見ようとしなければ、見えないものです。差別に気付く感性



を磨いていくために、まずは人権・同和教育ホームルーム活動での自分自身の取り組み方を振り返ってみてください。いい加減な気持ちで臨むことは、結果として差別を許すことにつながるおそれがあります。しっかりと考え、意見を発言し、周りの意見も聞く、家になったら、今度は家族と話し合う、これを作文にしてほしいと思います。